

楊素と薛道衡

網 祐 次

一

隋の楊素は、その「山齋独坐贈薛内史」詩二首に曰ふ、

(一) 居山四望阻 風雲竟朝夕

わが住める此の居室からは四方の眺望が山々に遮られてゐて、
風の音を聞き雲をながめつつ明け暮れを過ごす。

深溪横古樹 空巖臥幽石

日出遠岫明 鳥散空林寂

おく深い谷川の辺には年ふりた樹木が一面に生え茂り、うつろ
な窟には石が幽によこたはってゐる。

あしたに日が昇ると遠くの山はだまでも明かに見え、ねぐらを
飛びたつ鳥は餌を求めて散りゆき其のあとは林もひっそりす
る。

蘭庭動幽氣 竹室生虚白

落花入戸飛 細草当階積

わが庭には蘭が生えてゐて奥ゆかしい香がただよひ、室は竹に

楊素と薛道衡

おほはれて他に人かげも無く白い光線がさしこむ。

また落花が飛んできて戸口に入り、階段には小草が茂ってゐる

桂酒徒盈樽 故人不在席

日暮山之幽 臨風望羽客

さても我が傍なる樽には酒が満ちてゐるのに、旧知の君が此の
席に見えないので共に酌みかはずこともできず誠に心さびし
い。そして日が暮れ山も一しほ幽寂になるころ、われは独り風
に向ひ吹かれながら仙人にも比うべき君をひたすら待ち望む。

(二) 巖壑澄清景 景清巖壑深

白雲飛暮色 緑水激清音

いはほの谷は清い日の光をうけて澄みきってをり、日の光が清
らかなので「いはほ」の谷の奥ふかくまでも見える。

白雲が飛ぶやうに走って暮色が迫り、谷川の緑の水は岩にぶつ
かりあうて清らかな音をひびかせる。

澗戸散余彩 山窓凝宿陰

花草共栄映 樹石相陵臨

谷川ぞひの戸には落日が其の余光をなげかけ、山ぞひの窓にはもう夜霧がたちこめてゐる。

近く庭では花や草がともどもに美しく照りはえ、遠く谷川の辺では樹木と窟の石とが互ひに高きを競うてゐるかのやうである。

独坐対陳榻 無客有鳴琴

寂寂幽山裏 誰知無悶心

この時、待ちわびる君が見えないので我は唯ひとり坐して、ふるい坐床いすに対し又かたわらなる琴をながめてゐる。(そしてこの坐床にすわるべき君、この琴を弾じ聞かせてくれるであらう君をおもふ。楊素の贈薛播州十四首の第十二首にも、「鳴琴久不聞 属聴空流水」といふ)

かくて幽寂な此の山中にあって、苦しみ憂へる心が無い、とは誰が知らうぞ。

以上は二句ごとに押韻。但し第一首と第二首とは韻を異にする。

右の詩を贈られた薛道衡は、その「敬酬楊僕射山齋独坐」詩に曰ふ、

相望山河近 相思朝夕勞

竜門竹箭急 華岳蓮花高

君のかたを望むに山河は近いが、いかんせん往くすべもなく、朝な夕な君のことを思ふて心をいためる。

かの竜門の方からの水は竹箭の如く急速に流れ走り、また、か

の華岳は蓮花のやうな形で高くそばだつてゐる。

岳高嶂重疊 鳥道風煙接

遙原樹如薺 遠水舟如葉

華岳は高くて、険峻げはしい峯々がかさなり、鳥しか通へないやうな道が風吹き煙もやのかかる大空につらなり、

河のほとり遙かに連る原には樹木が「なすな」の如くに、また遠くから流れてくる河水の其の面には舟が木の葉のやうに、小さく見える。

葉舟且且浮 驚波夜夜流

露寒洲落白 月冷函関秋

かくて旦々あけくれ夜々、葉のごとき舟は浮かび走り河水は何ものかに驚ろかされたかのやうに波たちさわいで流れ、

寒つめたい露がおり月かけは冷えびえとして、洲のなぎさは白く函谷関のあたりまでも秋色が満ちてゐるやうである。

秋夜清風発 弹琴即鑑月

雖非莊舄歌 吟咏常思越

この秋の夜ここでは清らかな風が吹き鏡のやうな月がかがやく、その月光のもとで風に吹かれて琴をかきならしつつ、越人莊舄ならぬ吾も越のことをのみ思ひつづけて吟咏する。

(いにしえ、莊舄は楚に仕えて富貴となったが、病あるに及び、故国なる越を思ふのあまり、越声した、と伝へられる。楊素は、このころ越国公に封ぜられてゐたから、そのことを踏ま

へたのだ、と清の張玉毅の古詩賞析注に云ふ)

右の詩は四解より成り、解ごとに韻を換える。而して第一解は第二・四の句に押韻、第二・三・四の解は、それぞれ、第一・二・四の句に押韻。尚ほ、第二解の初句「岳高」云々は第一解の終の字「高」を承け、第三・四の解の初句も、それぞれ之に倣ふ。いはゆる蟬聯体の形式である。

二

前項(一)に挙げた詩は、その題名の示す如く、楊素の僕射たるときであり、同時に又、薛道衡の内史たるときの作であるが、然らば、その僕射たり内史たる期間のうちの何れのころであり、且つ、その当時の、かれらの心境は何如なるものであったであらうか。

(イ)

唐の魏徵の撰する隋書の本伝・文帝紀・煬帝紀によって、先づ楊素について述べる。

楊素が始めて仕えたのは、「周の冢宰なる宇文護」の中外記室となつた時であらうが、それは、唐の令狐綯らの北周書の武帝紀の保定元年(A D 五六一) 正月の条に、「冢宰宰護を都督中外諸軍事となす」とある其の頃であらう。それが、もし、かれの二十歳ころとするならば、その生年は、逆算して西紀五四一年ころと推定される。而して、かれの父なる楊敷は、唐の李延寿の北史四十一の本伝によると、魏(A D 五三五―五五六)・周(五五六―五八一)に仕えてゐるから、隋って、楊素は

西魏王朝治下の大統七年ころの生まれと考へられる。因みに、楊堅(のちの隋の文帝)も其の年に生れ、薛道衡は其の前年に生まれた。

楊素は、隋の文帝の開皇九年(五八九) 正月に陳国が平定した其ののち、越国公に封ぜられた。時に四十九歳ころである。それからは、信州総管、荊州総管、内史令などを経て、開皇十二年(五九二) 十二月には尚書右僕射に、仁寿元年(六〇一) 正月には尚書左僕射に、而して煬帝の大業元年(六〇五) 二月には尚書左僕射より尚書令に、翌二年六月には、尚書令太子大師から司徒に昇ると同時に、越国公から楚公に改め封ぜられた。かくて、同年七月に在官のまま卒した。時に六十六歳ころである。随って、越国公たるは開皇九年ころから大業二年六月までであり、僕射たるは開皇十二年十二月から大業元年二月まで、といふことになる。

楊素は、少い頃から大志をいだいて小節に拘らず、「常器に非ず」と高く評価せられた。また、甚だ学を好んで博く群書に通じ、善く文をつくり、草隸にも工みであった。楊堅(楊素と同じく弘農郡華陰の人)とは、その北周の丞相たる時も、また、禪りを受けて隋王朝を開いて後も、深く交つた。その間、かつて楊素は、己の妻なる鄭氏を、「我もし天子とならば、卿は、定めて、皇后たるに、堪へざらむ」と戒めたことがある。元来、当時は、天子といつても、初から特別な人種であつたわけではなく、誰でも、地位が進み権力が強くなれば、なり得るといふ考へ方が、以前から有つた。しかも楊素は、名家の家柄であり且つ隋の王室とは一族である、との自負心を持ってゐたので、その志向する所は大であつたらうし、随って、右の言も単なる一時のものではなかつたのであら

う、と推測されるが、そのために、文帝の忌む所となり、御史大夫（開皇四年に拜したものを免ぜられたこともあった。しかし、とにかく、武将としても大功をたてた。

文帝の第二子なる晋王広（のちの煬帝）との関係は、開皇二十年（六〇〇）に王の長史となったことに始まる、而して、晋王は躬を卑くし礼を厚くして楊素に交はり親しみ、後に兄なる勇（皇太子）を却けて太子となったのについては、かれの謀によることが多い。即ち、隋書の楊約（楊素の異母弟）伝には、晋王広の意を伝へられた楊約が、そのことを楊素に告げた時の状を、「素は、もと、凶險なり。之を聞いて大いに喜び、乃ち掌を撫して対へて曰く、云々」と記し、つづいて、実行にうつすさまを述べてゐる。

これより前、開皇十二年（五九二）に、かれは尚書右僕射に進み、高頼とともに専ら朝政を掌ったが、朝臣のうちでは、高頼（楊素とは競争相手である）を頗しく推し、牛弘（その伝の論には、大雅の君子、と謂ふ）を敬し、薛道衡（これに好感を持ってゐたことは後に詳述する）を厚く接し、前任者なるもとの尚書右僕射蘇威（節操のない人物である）を蔑視した。而して、かれら以外の朝廷の貴臣は、すべて、ふみにじられた。隋書の撰者なる魏徵が、「楊素の才藝風調は高頼よりも優るが、高頼の誠を推し国を体し、物を処すること平当にして、宰相の識度あるには、遠く及ばぬ。」と謂ふものは、けだし適評であらう。

仁寿元年（六〇一）高頼に代り尚書左僕射となつてからは、文帝に貴び重んぜらるること日ごとく隆く、その貴盛なるは近古以来いまだ聞か

ざる所なりとまで謂はれた。当時の文帝の詔（嚴可均の全隋文は仁寿二年にかけると云ふ、「尚書佐僕射越国公なる素は、志度恢弘にして機鑿は明遠。佐時の略を懐き、経国の才を包む。（中略）端揆に居りて機衡に参り賛けてよりは、朝に当りて色を正し、言を真にして隠すことなし。文を論ずれば辞藻は縦横、武を語れば権奇まじは間り出づ。既に文かつ武、ただ朕の命ずる所のままにして、任使の処、夙夜に怠る無し。（中略）唯に廊廟の器なるのみに非ずして、實に是れ社稷の臣なり（後略）」と。溢美の言とは言ふものの、しかし、その方向に在ったことは確かであらう。

かくて、かれは、朝臣の己に違ひ忤ふ者あれば、たとひ至誠もて国を体する者と雖も、すべて之を陥れ、また親戚であるならば、たとひ才なき者でも之を進め擢んでた。故に朝廷は靡然として皆かれに畏れ附いたといふ。

以上は、仁寿の前半期（六〇一・二）のことで、かれの最も得意な時期である。しかるに、当時、兵部尚書の柳述（文帝の婿。その頃、恐らく楊素にとって代らうとしてゐたであらう。而して結果は、その通りになつた）と大理卿の梁毗とが、楊素の非を奏上したので、帝は漸く楊素を疎んじ忌むに至り、遂に敕を出して曰ふ、「僕射は国の宰輔なり、みづから細務をなす可きにあらず。ただ三五日（十五日）に一たび省に向ひて大事を評論せよ」と。（全隋文は仁寿三年にかけると云ふ）。即ち、外面では優崇して、実は、かれの権を奪ふわけである。かくて仁寿の「末」には、もう省事を通判しないやうになつた。本伝は、之につづけて、「四年」（六〇四）云々と記すから、右の末とは、仁寿四年の謂ひでは、あるま

い。

文帝は、楊素を重く用ひる前には、李徳林・高頰を次々に用ひて南北統一の業を成し、楊素の次には柳述を重んじた。けだし、或る人に頼りすぎると、やがては、天子たる己の地位を奪はるに至らんことを虞れたのである。何となれば、文帝自身、かつて、そのやうな径路を蹈んで北周を奪ったのであるから。しかも、煬帝も亦、特に一人のみを重く用ひつづけることを避けた。

文帝は仁寿四年七月に崩じ、直ちに太子広が即位する(即ち煬帝)が、文帝の崩じたのは、太子と楊素らとの謀による、と謂はれる。

楊素は、かくの如く、煬帝に対して建立の功があり、また、煬帝の即位後まもない仁寿四年八月には漢王諒の反を平定して大功をたてた。かくて、煬帝の時になって再び重く用ひられるが、既に天下無事になってしまふと、やがては帝に猜忌せられるやうになった。しかも、煬帝は、表面は厚い礼を示し、たとへば、かれの功を勞つては、仁寿四年(六〇四。全隋文による)の詔に、「公は乃ち先朝の功臣にして、勲庸は克く茂なり」と称し、また、かれの卒年の大業二年(六〇六)「楊素の碑を立てる詔」にも、煬帝は、王室のために誠節をつくしたと述べてゐるが、しかし内なる情は甚だ薄くて、たとへば、結果的には卒する前の月、即ち大業二年六月に、司徒といふ最高の位につかせたが彼の実権は失はれ、しかも、その時、かれを楚に改め封じた。それは、太史が「楚の分野には大喪あり」と奏した、その忌むべき地であった。また、楊素の病臥中、煬帝は毎に名医を診候させて上薬を賜つたが、一方では、密にひそかに医人に病

状を問ひ、その死を待ったといふ。而して楊素自身は、名位は已に極まれり、と考へてゐたので、薬をのまうとも、また、病を慎しまうともせず、つねに、異母弟の約に、「われ豈須臾も活きんや」(生きながらへようは思はぬ)と語つた。

以上は、かれの官歴と性格との概略であるが、尚ほ又、かれは財貨を貧り冒し、田地などの産業を営み求め、東西二京に在る居宅は侈麗を極めた、ことなどのため、世論に鄙まれたといふ。

隋書撰者の魏徵は、かれのことを、次の如く、論じてゐる。即ち先づ、「文武の資を兼ね、英奇の略を包み、志懐は遠大にして、功名をば自らに許す。その凶を夷げ乱を静めたるを考ふるに、その右に出づる功臣は無く、又、その奇れたる策と高き文とを覽るに、一時の傑となすに足る」と称揚しつつも、つづけて、「然れども、専ら智詐を以て自ら立ちて仁義に由らず、時主に阿諛して其の心を高下す。かくて、終には君を奢侈に陥れ、また、冢嫡(正妻の長男、とは文帝の長子なる勇をさす)を廢するを謀りて、国を傾け危くすることを致せり。楊素こそは禍敗の源をなせるものなり」と痛論する。因みに、かれの本伝は、その集のことを云はぬが、隋書經籍志は、集十巻を録する。

(口)

薛道衡は河東汾陰の人。生年は、煬帝の大業五年(六〇九)に七十歳で卒したことから逆算して、西紀五四〇年と考へられる。而して、それは、父の孝通が西魏と北周とに仕えたことから推して、魏王朝治下の大

統六年に當る。かれは、初め北齊に仕え、北齊が亡びてのちは北周に、ついで、隋の文帝に仕へて内史舍人となり、その年には散騎常侍を兼ねて陳に使した。時に開皇四年(五八五)。のち吏部侍郎となり、ついで内史侍郎に進み、その声名は益々顕れたが、仁壽中には檢校襄州總管となり、煬帝が位を嗣いだ仁壽四年(六〇四)七月すぎには播州刺史に転じた。

右のうちの内史侍郎となつてゐた期間は、いつであつたであらうか。試みに、かれの本伝を見ると、吏部侍郎となつてのち、揚州にゐた晋王広が彼を招かうとしたが、之に応ぜず、それから数年後に内史侍郎となつた。ところで晋王広(のちの煬帝)は、隋書の煬帝紀・高祖紀によると、「開皇十年十一月に江南の高智慧らが乱をなす」に及んで、揚州總管となつて江都に鎮したが、その翌年には藩に歸る。そのことから推すと、開皇十年十一月から数年後に内史侍郎となつたわけである。

かくて仁壽二年(六〇二)十月の文帝の修定五礼詔には、「内史侍郎薛道衡」とあり、且つ、かれの本伝には、襄州に出る時の文帝の語(撰兼撫萌俗)が見える。而して、文帝崩じて(仁壽四年七月)、煬帝が即位するに及び、襄州から播州に転じ、一年あまりで仕を致して都に還る。かれが未だ到着しないとき、煬帝は、内史侍郎虞世基に、かれを秘書監に任じたいと言つたこともあるが、その後の彼は、何ごとにつけ煬帝の意を害する結果となり、終に殺された。時に七十歳で、楊素の卒後三年である。

薛道衡は六歳にして孤となる。而して精を専らにして学を好み、年十三のときには、左氏伝を講じ、子産の功績を述べた「国僑賛」を作り、

頗る詞致あり、と称せられた。のち、北齊第四代の武成帝に仕へて太尉府主簿たるころに周や陳からの使者を接待し、次の後主の武平の初(五七〇)には詔を受けて諸儒と三礼を修定した。また、陳使の傅宰が北齊に聘した時、かれは主客郎として之を接待し、傅宰の贈る五十韻詩に和し、南(傳)・北(薛)ともに美なり、と称せられた。しかるに、魏収(北齊の人)は、「傅宰は、謂はゆる、蜎をば魚に投ずるのみ」(薛の傑作を誘ひだす役割をなせるのみ)と曰つた。のち、文林館(文学の士を徴して之に充てた)に、盧思道・李德林らと共に入り、かれらと名を齊しくし、かつ親しく交はる。隋の文帝のときには、開皇四年(五八四)十一月、陳に使した。そのころ、江南では篇什を好み、陳主は尤も雕虫を愛す、と謂はれたが、薛道衡の作あるごとに、南人は皆これを吟誦した、といふ。

一体、他国からの使者を接待するには、才学の士を以て之に充てるのが古来の習慣であること、また、当時の一般的情勢として、北人は南方の文化を欲したこと、などを思ひあはすと、よつて以て、薛道衡の文才が何如に評価されてゐたか、を推すことができるのである。

かれは、ただに詩文に工みなるのみならず、たとへば、開皇八年に陳を伐つ軍に従ひ、兼ねて文翰を掌つたとき、総指揮官なる高頰から方策について意見を求められた其の答が、成敗の理を言ふこと分明で、聴く者をして轄然たらしめた。それで、高頰は、「もと、君には才学を期待してゐたが、そのみならず、籌略に於いても斯くの如く優れてゐようとは思はなかつた」と嘆じた。因みに、かれは文を作るに當つては、甚

だ思ひを鍊ったもので、たとへば、内史侍郎となつた頃、文を構ふる毎に、必ず空齋で、坐し或ひは横臥して沈思黙考し、もし戸外に人あるを聞くと、便ち怒つた。而して文帝は、薛道衡は文書を作りて我が意に称へり、と賞しつつも、亦、その迂誕なることを誡めた、といふ。

かれは文帝に優遇せられて上開府に進み、久しく枢要の地位に在つて才名は益々顕はれ、太子諸王は競うて彼と交はり、高頴・楊素も彼を推重し、声名は甚だ盛んであつた。しかし、それは又、かれの運命の転換ともなつた。即ち、仁寿中に楊素が専ら朝政を掌つたころ、薛道衡は本より楊素と親しかつたので、文帝は、かれが久しく機密を知つてを欲しないやうになり、(文帝が何故そのやうな考へ方をしたか、については、既に第五頁初に述べた)遂に檢校襄州総管として外任に出すこととした。その時の状を本伝は次の如く、述べてゐる。即ち薛道衡は、一旦にして朝廷から離れ去ることよつての悲恋の情に堪へられず、哽咽して其の由を言上した。文帝は愴然として容を改めて、年老いた彼の勞をねぎらひ、かつ曰ふ、「これからは兼任として、地方を治めてもらひたい。しかし、朕が頼りとする所の君を、今、遣はすことは、実に片うでを断たれる思ひがする」(爾光陰晚暮 侍奉誠勞 朕欲令爾將撰兼撫萌俗 今爾之去 朕如断一臂)と。ここに撰兼と言ふのは、「内史侍郎」たることは其のままとして、「襄州総管」を兼任させる謂であらうが、相ひ異なる二人の立ち場が看取されて興味ふかいものがある。

煬帝即位の翌年ころ、かれは、播州から都に還るに及び、高祖文皇帝頌を上つた。しかるに、帝は之を悦ばずして蘇威を顧みて曰ふ、「先朝

を羨みするは、魚藻の義なり」と。けだし、毛詩の序に、魚藻篇のことを、「幽王を刺るなり。言ふところは、万物その性を失ふ、(かくの如き時なれば)王は鎬京に居るも、將に以て自ら楽しむ能はざらん。故に君子は古の武王を思へるなり」と云ふ。つまり、文帝をほめるのは、煬帝自身をそしめるものだ、と解したわけである。ところで、当時、楊素・薛道衡らに代つて朝廷で勢を占めてゐたものは、柳述・虞世基・蘇威であるが(隋書の各本伝)、その蘇威は、かつて楊素から蔑視されてゐた(楊素伝)(本稿第四頁)ことを指摘しておく。

かくて、煬帝は、かれを司隸大夫となし、かつ、罪せんとした。しかし、かれは之を悟らず、かれと親しき司隸刺史房彦謙が、謹慎せよと諫めたが之を用ひず。たまたま、新令を議すること有り、久しく決せぬ折柄かれは、「もし高頴が死されずならんば解決できたであらうに」と言つたことが、また、煬帝を怒らせた。しかも、かれ自身は、大過に非ず、と考へてゐたが、遂に縊殺された。要するに、かれの情勢判断があまかつたのである。しかし、天下は之を冤なりとした。尚ほ、かれには集七十卷あり、世に行はれた(隋志は三十卷を録する)

隋書卷五十七は、盧思道・李孝貞・薛道衡ら三人の伝を含むが、その卷末に、かれらを概評し、先づ、「二三子是有齊の季に、みな、薛藻を以て著しく聞こえ、周・隋を歴て、みな推重せらる。李は一代の俊偉と称せられ、薛は時の令望なり。かれらは、靈蛇(の珠)を握つて俱に照らし、逸足を聘せて並び駆け、文雅縦横にして金声は玉のごとく振ふ。静かに言に揚榷するに盧は二三子の右に居る」とて、主として、その文

辞を謂ふ。尚ほ、隋書文学伝序には、盧・薛らは時の文人にして当世に称せらると云ひ、北史三十六には、薛道衡が雅適にして、文宗たることを撞にし、令望を獲たのは、父祖代々に基づくものである、ことを述べつつも、一転して、「而るに、運は季叔に逢ひ、卒に、誅戮を蹈めることは痛ましい乎」と云ふ。

三

楊素と薛道衡との交情を窺ふに足る主要な資料の一つとして、楊素の「贈薛播州」詩十四首がある。これは、煬帝の初期、すなわち仁寿四年七月から翌大業元年秋ころまでの約一年有余、すなわち、薛道衡が播州刺史たる時の或る時期に贈ったもので、時に楊素は六十五歳ころ、薛道衡は六十六歳ころである。而して、その第二首には、

両河定宝鼎 八水域神州
函関絶無路 京洛化為邱
漳滏爾連沼 涇渭余別流
生郊滿戎馬 涉路起風牛
班荆疑莫遇 贈綺竟無由

とて、「周隋の交、戦乱がつづいたので、君と余とは漳水・滏水が沼を連ねる如くである筈なのにも拘らず、実は涇水・渭水が清濁ながれを異にするが如く別であって、親しく交を結ぶ機がなかった」ことをいふ。二人は、その本伝によると、それぞれ、夙に北周のとき、武帝にも、ま

た、楊堅（当時、北周の相）にも、仕えてゐたのである。

その後、楊堅は北周の禪を受けて隋王朝を開き、（第三首「五緯連珠聚」は、それに触れる）、賢人を求むるに及び、二人は共に知遇に遭ふ。第四首は、そのことを述べて、

道昏雖已明 政故猶未新
剝舟洄水際 結網大川濱
川遊迎釣叟 入夢訪幽人
植林雖各樹 開榮豈異春
相逢一時泰 共幸百年身

といふ。「春に咲き匂ふ花の如く、賢才が集められた其の当時に、始めて君に逢ふことができ、いつまでも変らぬ友情を、と、こひねがった」のである。

而して、その友情の密なることについては、第五首の終に、「傾蓋如旧知 彈冠豈新浴 利心金各斷 芬言蘭共馥」（始めての間柄の如くではなくて旧知のやうであり、二人は心を同じくして堅くするどく、かつ、その言はかぐわしい）と言ひ、また、第六首には、「余が端揆（宰相）となつてよりは、君も帷幄に陪し、その高調・縹藻の著作文章あること」を先づ言ひ、つづいて、「或如彼金玉 歲暮無凋變 余松待爾心 爾筠留我箭」とて、二人は共に相ひ俟ち、その心は常に不変なることを言ふ。而して、第七首にも、われらは、ともに、承明廬にて拝謁を待ち、上林苑の羽獵に陪し、甘泉殿の郊祀に侍するなど、いつも行動を共にし、かくて、「迎風含暑氣 飛雨淒寒序 相顧惜光陰 留情共延佇」とて、暑

い夏にも寒い冬にも、四季いつも、時間のたつのを惜しみ、相かへりみ
たらずみて立ち去りかねた、といふ。

以上のことがらは、之を前項(㊦)に徴すると、凡そ次の如くであらう。

即ち、楊素は開皇十二年(五九二)に尚書右僕射となり、その頃から薛
道衡を厚く接して交はり、ついで、仁寿元年(六〇一)尚書左僕射に進
み、かくて、その貴盛なることは近古いまだ聞かず、とまで謂はれ、仁
寿中には朝政を専ら掌つてゐた。而して、その頃は亦、薛道衡が内史侍
郎として久しく枢要の地位に在り、声名は当時これと競ふ者なし、と謂
はれた時期でもあった。

しかるに、その全盛期は、同時に衰兆をも孕んでゐた。即ち、楊素の
場合(第四頁)と殆んど時を同じくして、かれも亦、文帝の忌む所とな
り、遂に檢校襄州總管として外任に出されたのである。

「贈薛播州」詩の第八首には、薛道衡が其の任地なる江漢地方で治績
を挙げたことを云ふが、その中に、「岷山に君もし遊ぶことあらば」云
々の句がある。それは、晋の羊祜の卒後、襄陽の百姓が、その徳を追慕
して岷山に碑をたてた故事を踏まへつつ、薛道衡の任地を示したのであ
る。随つて、この篇は、かれが襄州に在る時のことを言ったものであら
う。

第九首は、第八首の終の「已」字をうけて「已成」と言ひ、漢陰(襄
州)から嶺表(播州)に遷つた薛道衡が、北風の路を思ふであらうこと
を述べ、第十首以下は楊素自身のことを言ふ。而して、第十首は第九首

の終の「北風」をうけて始まる。曰く、

北風吹故林 秋声不可聽

雁飛窮海寒 鶴唳霜臯淨

含毫心未得 聞音路猶寬

唯有孤城月 裴徊独臨映

弔影余自憐 安知我疲病

「孤城を照らす月光のもと、影法師をいとほしみつつ徘徊する、この
余のことを、君は心にとめてゐて欲しい」とは、前首の「君見南枝巢
応思北風路」に対応させたのである。

次に第十一首は、第十首の「終」の病字をうけて始まる。曰く、「榮
位に在つては足ることを知るべきであるが、このたび病を養ふ機会に閑
地に帰隱することになった。重厚な古人——君も亦その如くである
——の心が、わが知足帰閑の心境を知ってくれる」と述べ、つづけて、
「荒居接野窮 心物俱非俗 桂樹芳叢生 山幽竟何欲」とて、野の一隅
にある余が荒居、桂が叢生する山、この環境にふさはしく、心も世俗を
超越せる此の余が欲し求むる所のものは何か、といふ。その「何欲」を
うけて、第十二首には曰ふ、

所欲棲一枝 稟分豊諸己

園樹避鳴蟬 山梁遇雌雉

野陰冒叢灌 幽氣含蘭芷

悲哉暮秋別 春草復萋矣

鳴琴久不聞 属聽空流水

幽寂な此の山園に在って、己の本性に即した生活を楽しむことを念願としつつも、ふと、君と別れて久しくなることを思ふとき、如何ともしがたくなる。

第十三首は、前首の終の「水」をうけて曰ふ、

秋水魚游日 春樹鳥鳴時

濠梁暮共往 幽谷有相思

千里悲無駕 一見杳難期

山河散瓊蘂 庭樹下丹滋

物華不相見 遲暮有余悲

君と別れてこのかた、春秋の節物風光にあふては、遙かなる君を懐ふこと切なるものがあるが、しかし、会ふ由も無い。わけても、今や年の暮に当っては、ことのほか悲しい、と言ふ。思ふに、播州在任は、仁寿元年七月ころから約一年あまりであるから、ここに「遲暮」とは大業元年についてであり、同時に又、老年をも意味するのであらう。時に楊素は六十五歳ころ、薛道衡は六十六歳。

右の詩の「悲」字をうけて、第十四首には曰ふ、

銜悲向南浦 寒色黯沈沈

風起洞庭險 煙生雲夢深

獨飛時慕侶 寡和乍孤音

木落悲時暮 時暮感離心

離心多苦調 詎假雍門琴

黯黯たる冬景色のなかで、われは悲しい思ひをしつつ遙かなる君のかた

を眺めてゐる。独り飛ぶ鳥が侶を慕ひ、孤りうたへる者が和する者を待つ、そののやうに。そして木の葉が落ちつくした此の年の暮にあたって、離別の情が、殊のほか、かきたてられて、この詩も悲苦の調が濃く強い、雍門の琴を借りるまでもなく十分に。

以上の十四首は楊素の本伝に、「楊素は嘗て、五言詩七百字をば播州刺史薛道衡に贈る。詞気は宏拔にして風韻は秀上、亦、一時の盛作なり。而して未だ幾ばくならずして卒す。道衡は嘆じて曰く、人の將に死なんとするや其の言や善し、とは、豈かくの若くなる乎」と云ふ、それである。而して、清の陳祚明は、その古詩選に、右の第十四首を、「亦謂ふべし、其の鳴くや哀し矣」と評した。けだし、何れも、論語泰伯篇に見える曾子の言を踏まへたものである。

四

本稿の初に挙げた楊・薛の贈酬の詩は、右の十四首のうちの何れの篇に云ふ所と同じ時期のものであらうか。薛道衡の作に、「竜門」「華岳」とあることから推して、楊素は、その方向——恐らく華岳のあたり——に在り、しかも、「相望山河近」と言ふから、二人の距離も、略々想像がつくのである。ただ、薛道衡の居り場所が審かではない。

ところで、楊素には、別に、また、「贈薛内史」なる題名の詩(A)があつて、それは、

耿耿不能寐 京洛久離群

横琴還独坐 停杯遂待君

待君春草歇 独坐秋風發

朝朝唯落花 夜夜空明月

明月徒流光 落花空自芳

別離望南浦 相思在漢陽

漢陽隔隴岑 南浦達桂林

山川雖未遠 無由得寄音

と言ふものである。而して、終の聯の「山川雖未遠」は、前掲薛道衡の「敬酬楊僕射」(第二頁)の「相望山河近」の意味する所と相ひ関聯するかと感ぜられる。また、「未遠」の故を以て、「望南浦」・「在漢陽」の語があるわけである。それは、薛道衡の居り場所の方角を示すものと考へられる。尚ほ又、この詩には、「独坐」・「待君」と言ひ、楊素の「山齊独坐贈薛内史」も其一には「望羽客」(第一頁)其二には「独坐」(第二頁)とある。

然るに、薛道衡には、別に、また、「重酬楊僕射山亭」の詩(B)

寂寂無与語 朝端去総戎

空庭聊歩月 間坐独臨風

臨風時太息 歩月山泉側

朝朝散霞彩 暮暮澄秋色

秋色遍阜蘭 霞彩落雲端

吹旌朔氣冷 照劍日光寒

光寒塞草平 氣冷咽笳声

楊素と薛道衡

將軍獻凱入 藹藹風雲生

がある。ここに、「重ねて酬ゆ」と言ふ所以は、楊素が初に贈った「山齊独坐」詩に酬ゆるに、「相望山河近」云々を以てし、次に、また、楊素が「重ねて贈った」それに対して、「重ねて酬いた」からであらう。然らば、楊素が「重ねて贈った」詩とは何如なるものであったか。筆者は、左に記すが如き理由によって、前掲の(A)「耿耿不能寂」が、それではないか、と考へたいのである。

(1) ABの内容を視るに、贈酬の体にふさはしい共通点がある。即ち各々は前半に、友から離れて独り在って待ちこがれることを言ひ、後半には、Aでは、薛道衡の居処の方を望むことを、而して、Bでは、己の居処の状を、それぞれ、述べてゐる。

(2) 右の内容を述べるについての表現の類似。即ち、ABは、いづれも四句を一解として四解より成り、解ごとに韻を換へる。而して、第一解は二句ごとに押韻、他の三解は、第一・二・四の句に押韻。尚ほ又、巧妙な蟬聯法を用ひて、第一解の第三・四の句の終二字を承けて第二解の第二・一の句の初二字とし、第三解以下も、それに倣ふ。

上述の如く、果して、薛道衡の「重酬」(B)は、楊素の「贈薛内史」(A)に對しての作であるとするならば、(B)の第二句「朝端去総戎」から推して、この贈酬詩(A)(B)は、襄州総管として外任に出でた時の作であらう。而して、文帝の語「爾をして撰兼せしめむ」(第七頁参照)と有るによつて、内史侍郎たることは——たとひ名目のみであるにしても——従前ど

ほりであるから、題名が「内史」となつてゐても差支へはない。

もし然りとするならば、本稿の初の二人の贈酬詩も、薛道衡が襄州に在る時の作と言へるのではないか。而して、楊素は当時、僕射であつたことは、第三頁に述べた所によつて明らかである。因みに薛道衡の内史侍郎たるは、たとひ名目のみであつたにしても、それは、いつまでのことであるか、を審かにしがたいが、或ひは、煬帝の即位後、襄州から播州に転じた、その頃まで、ではあるまいか。もし然らずとしても、或ひは、播州から都に還つた、その頃までのことであらうか。因みに、隋書百官志によると、隋には、内史省の侍郎は四人であるが、薛道衡の播州に在る頃、虞世基が内史侍郎として、煬帝に厚く礼せられ、専ら機密を典つてゐた(隋書本伝)ことなども何らかの参考となるかも知れない。

楊素の「贈薛播州」詩十四首の前半は、二人が共に隋王朝に仕えて遂には顕要の地位に至る、その間の、最も順調得意な時期を追憶するものである。而して、後半には、襄州・播州に在る薛道衡を思慕する切実な心情や、己の山居の状と心境とを述べてゐる。この現実と、かの往事とは、余りにも顕著な対照である。而して、後半の襄州時代に上掲の詩が贈酬された、と考へたい。とすると、そのためか、楊素の『山齋独坐』詩第二首の「誰知無悶心」(第二頁)・『贈薛内史』の「耿耿不能寐」(第十頁終)や、薛道衡の『敬酬山齋独坐』の「相思朝夕勞」(第二頁)「吟咏常思越」(第二頁)・『重酬楊僕射山亭』の「寂寂無与語」(第十一頁)などには、殊のほか深い情が籠められてゐる、と感ぜられるのであつて、順調な時代に於ける単なる友恋ひしと言ふものとは、自ら異なる所がある

やうに思はれる。

尚ほ、楊素の「誰知無悶心」とは、易の乾卦の「遯世而无悶 不見是而无悶」の如き境地に達したいと欲しつつも、それにはなりきれぬことの悩みを言つたものであらう。而して、清の沈徳潜は、その古詩源に、楊素を評して、「武人にして、また、奸雄なり。而るに、詩格は清遠にして、転た、出世の高人に似たり。真に解す可からず」と謂ふが、もし楊素の心境が上記の如しとするならば、そこに、解し得べき何ものかが、或ひは存するのではあるまいか。

(昭和四十年十二月稿)

尚ほ、二人の、特に薛道衡の詩については、後の機会に述べたいと思ふ。